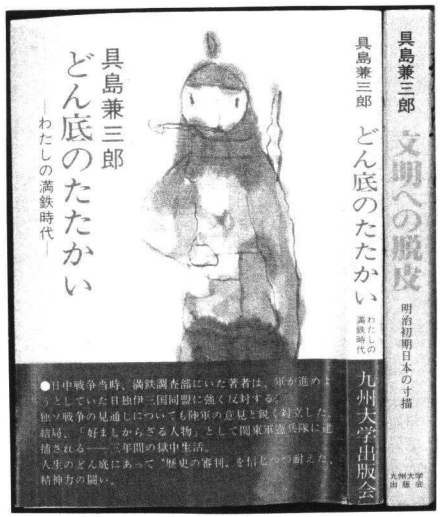
具島兼三郎（ぐしまかねさぶろう）　國際政治學者、法學博士。明治二十八年十一月五日福岡縣生れ（一九〇五―）。昭和二年九州帝國大學法文學部卒。同志社大學法學部助教授を經て、十一年南滿洲鐵道株式會社調査部に入る。十七年日獨伊三國軍事同盟反對の論陣を張り、關東軍憲兵隊に拘禁、終戰時まで入獄。戰後『讀賣新聞』論説委員、九州大學法學部教授、産業勞働研究所所長、長崎大學學長等歴任。

著書に『戰爭平和論』（昭和二十二年六月）二十五日京都・大雅堂）、『ファシズム』（昭和二十四年四月五日岩波書店「岩波新書」）、『激變するアジア』（昭和二十八年一月）二十日岩波書店「岩波新書」）、『現代の植民地主義』（昭和三十二年七月十七日岩波書店「岩波新書」）、『現代の国際政治』（昭和四十年五月）二十九日岩波書店）、『反安保の論理』（昭和四十四年十一月）二十日三一書房「三一新書」）、『どん底のたたかい―わたしの満鉄時代』（昭和五十五年八月十五日福岡・九州大学出版会）、『文明への脱皮―明治初期日本のすがた』（昭和五十八年九月）二十日福岡・九州大学出版会）、『全面核戦争と広島・長崎』（昭和五十九年七月五日岩波書店「岩波ブックレット」）等。